

令和2年度 第1回
北海道立総合博物館協議会

議事録

日時：令和2年10月16日（金） 13時30分開会

場所：北海道博物館 講堂

令和2年度 第1回北海道立総合博物館協議会議事録

会議名	令和2年度 第1回北海道立総合博物館協議会
開催日時	令和2年10月16日(金) 13時30分～15時45分
開催場所	北海道博物館 講堂
出席者	<p>【委員】 大原昌宏委員(会長)、中村吉雄委員(副会長)、児島恭子委員、佐々木史郎委員、住吉徳文委員、中川充子委員、湯浅万紀子委員 以上7名出席</p> <p>【事務局】 井田操文化振興課課長補佐、石森秀三北海道博物館長 ほか</p>
傍聴者	0名
議 題	<p>(1) 令和元年度北海道博物館事業実績報告(内部評価実施報告)</p> <p>(2) 「第2期中期目標・計画」について</p> <p>(3) 令和2年度北海道博物館事業経過報告</p> <p>(4) 令和3年度北海道博物館事業年度計画概要報告</p> <p>(5) 北海道立総合博物館協議会のあり方について (第1期中期目標・計画期の総括と反省)</p>

※・単なる相づち及び言い直しなどは、原則として割愛する。

・内容に応じて《意見・提案》、《質疑応答》等の見出しを便宜的に作成した。

1 開会

池田学芸主幹：ただいまから令和2年度第1回北海道立総合博物館協議会を開催いたします。それでは、開会にあたり、北海道博物館館長の石森より、ご挨拶申し上げます。

2 館長あいさつ

石森館長：本日はお忙しい中北海道立総合博物館協議会のためにご参集賜りまして本当にありがとうございます。コロナの感染防止のためにこの博物館でもさまざまな手を講じているところではありますが、皆様方のお仕事におかれましても、従来に増してご多忙になさっているのではないかと思います。各委員それぞれお忙しいところですが、特に中村副会長におかれましては5月で北海道アイヌ協会副理事長にご就任なされたということでお忙しくなっております。佐々木委員におかれましてはウポポイが7月12日に開園したということで、国立アイヌ民族博物館の館長としてお忙しく勤めているところでございます。また、新たに中川充子様にも委員として加わっていただきました。本日は、北海道博物館におきましても二期目の中期目標・計画の年度で最初の会議ということでもございますので、議事次第で示しておりますように一期の5年を踏まえて様々な点で不都合もあったということで、大原会長とも様々な形でご相談させていただきまして、より良い協議会のあり方等々につきましても皆様にご審議いただきたいと思っておりますので、よろしくお願ひ申し上げます。本日は本当にありがとうございます。

《配付資料の確認》

池田学芸主幹：続きまして、配布資料の確認をさせていただきます。
(以下、配布資料について説明)

池田学芸主幹：新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、室内の換気を行うため、開始から概ね1時間を目処に、休憩のご提案をさせていただきます。よろしくお願ひいたします。

《出席状況の確認》

池田学芸主幹：まず、本日の出席状況についてご報告いたします。本日の協議会には、定員7名中7名の委員にご出席いただいております。北海道立総合博物館条例第25条第2項にあります、協議会開催の条件である委員総数の2分の1以上の出席を満たしており、本協議会が成立しておりますことを、ご報告いたします。

3 北海道立総合博物館協議会委員紹介

池田学芸主幹：本日まで出席いただいております委員の皆様のご紹介をさせていただきます。
(以下、資料1-1に沿って協議会委員を紹介)

池田学芸主幹：続きまして、北海道環境生活部の職員を紹介させていただきます。
(以下、資料1-3に沿って本庁出席者を紹介)

池田学芸主幹：続きまして、北海道博物館の職員を紹介させていただきます。
(以下、資料1-3に沿って博物館出席者を紹介)

《協議会の公開》

池田学芸主幹：本日の協議会は、道の情報公開条例の規定により非公開に該当する要件はございませんので、公開の取り扱いとさせていただきます。
それではこの後の議事進行につきましては、大原会長にお願ひいたします。

《会長あいさつ》

大原会長：大原でございます。開催にあたりまして一言ご挨拶を申し上げます。ご存知の通りコロナ禍で非常に大変な世の中になっておりますが、私は北大総合博物館に所属しており、色々な対応に追われています。北海道博物館におかれましては同じ状況で非常に大変な状況だと思っておりますが、来年も再来年もあまり変わらない状況が続くと思っております。博物館自体の考え方を変えないといけないのかと考えております。そういった意味でも世の中が変わる時期です。協議会の先生方にも協力をいただいて北海道博物館を盛りあげていく、応援していくという形に協議会をさせていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

今日は、第一期の中期目標・計画についてご説明いただき、それについて博物館の外部である委員の先生方にご助言をいただきたいと思っております。また、前回前々回で協議会としての外部評価をまとめ、色々な意見も委員の先生方からもありましたので、議題5の協議会のあり方においてご議論されるかと思っておりますので、活発なご意見をお願いできればと思っております。よろしく願いいたします。

最後に、議事の円滑な進行についてのご協力をお願いします。

4 議題

議題（1） 令和元年度北海道博物館事業実績報告（内部評価実施報告）

大原会長：それでは議題に入ります。議題（1）「令和元年度北海道博物館事業実績報告（内部評価実施報告）」につきまして、説明をお願いします。

池田学芸主幹：「令和元年度北海道博物館事業実績報告」につきまして、先月9月3日（木）に開催されました内部評価委員会の報告と合わせてご報告いたします。

（以下、資料2及び要覧2019に沿って説明）

大原会長：それではただいまの説明につきご質問・ご提言がございましたらよろしく願いいたします。内部評価が終わったので、そのまとめについてご報告いただいたのと、それに追加して昨年のヒグマと、コロナ禍においてのおうちミュージアムの活動についてもご説明いただきました。

《質疑応答1》ヒグマ対策について

佐々木委員：一つだけ確認したいのですが、森林公園にヒグマが出没したお話なのですが、私どもも他人ごとではないですので、どのような対策を取られたのか、資料の30ページに捕獲にかかる役割分担をはじめ、関係機関内でも混乱が生じたとありますが、これはどのような事態だったかの、ご説明いただければと思っております。

川田総務部長：参考資料をお配りいたします。当館では野幌森林公園の管理も担当しております。以前は公園管理事務所があり、10人くらいの体制で公園利用や施設管理の対応をしておりましたが、機構改正などで人員が減り、平成22年度からは北海道博物館の総括グループが担当して、公園の安全な利用や施設管理を行っています。

参考資料は、6月10日に公園で目撃されてから、9月5日に捕獲するまでの時系列をまとめた資料になります。当初は北広島で目撃され、その後北上して森林公園に入ってきたということになっています。公園を通り越して北上し続けて情報大学付近で目撃が続きましたが、その先は森がないということでもどってきて、しばらく公園内に滞在し、ハスカップ農園が食害にあり、後に北広島に戻ってきました。ただ、テリトリーの関係かわかりませんが、山の方には戻れないということで再び公園に近づいてきて公園の南部にあるデントコーン畑で食害がありました。まもなくして北広島市の箱罫にかかって捕獲されたという経過になっています。この時に、当館としては公園利用者の安全確保と、市町村が実施するヒグマの捕獲対策に土地所有者として協力するという役割がありました。主には、毎日巡視を行い、ヒグマの出没情報やフン

などの痕跡情報を確認し、看板を作って出没情報を掲示して公園利用者に注意喚起をしてきたというのが当館の仕事でした。出没してから捕獲されるまでの間、延べ100回くらい毎日職員3人が交代で巡視してきました。道のヒグマ管理計画の中では捕獲対策については市町村が実施することになっておりますが、ただ、この近辺では77年ぶりに出没したということもあり、当館もそうですが地元の江別市もヒグマ対策の経験がなかったので、警察や消防なども入った関係機関での役割分担の中でも混乱が生じたという状況もありました。ただ、直接的には石狩振興局がヒグマ対策の所管をしておりますので、その主導で捕獲対策を行い最終的に北広島市で捕獲されました。今後も出没しないに越したことはありませんが、もしまた出没したら当館としても対応が必要になってきます。

《質疑応答2》内部評価資料について

大原会長：他にございますでしょうか。資料2の4ページに全体の結果がありますが、過去の内部外部や外部評価と比べられるものはありますか。

池田学芸主幹：基本的に前年度に協議会としての外部評価をお願いしたところですが、そこで過去4年間の比較ができるようにということで、皆様にお配りしました。最終年を踏まえて、5年間を比較するという資料は今日の段階では作れておりません。もちろんそれらを統合した上で比較対照し5年間の検証をして、どういう傾向や推移があったかという検証をやっていきたいと考えています。

大原会長：外部評価と内部評価の結果は同じと考えてよろしいでしょうか。

池田学芸主幹：情報発信の部分で外部評価ではBがついています。特にICTチームを作れなかったことが外部評価の際に議論になりましたが、それが進めなかった部分を踏まえてBになっていました。ですので、そこが内部評価と異なる点になっています。

大原会長：ありがとうございます。他の委員の方いかがでしょうか。

湯浅委員：外部評価を受けて、内部評価を検討する時に外部評価に対して意見があったなど、何かディスカッションするような項目があれば教えてください。

池田学芸主幹：委員会の場で昨年度の内部評価ということで、外部評価がどうだったかという資料はまずは考えずに、あくまで昨年度の自己評価ということで行いました。それで外部評価がどう、という議論にはなっておりません。まさに今の湯浅委員のご質問のあたりが議題5で今後の内部評価や外部評価のあり方について進め方の事務局案を、これまでの指摘を踏まえてご提案させていただく予定になっています。その場での議論にしたいと考えています。

《質疑応答3》おうちミュージアムについて

大原会長：議題5の「協議会のあり方」のところでもた戻ってくるかもしれませんが、この場では内部評価についてよく分からないところについて質問を受ける時間かと思えます。ヒグマの件もご質問いただきましたので、おうちミュージアムについてはいかがでしょうか。非常にユニークで全国に広がった活動でした。もしくは、何か追加でご説明があれば。

池田学芸主幹：おうちミュージアムは現在まで続いている活動ですので、議題3の今年度事業の実施状況として詳しくご説明できればと思います。

議題(2) 「第2期中期目標・計画」について

大原会長：それでは、次の議題に入ります。議題(2)「第2期中期目標・計画」につきまして、説明をお願いします。

池田学芸主幹：(資料3及び資料4に沿って説明)

大原会長：非常に多岐にわたる目標と計画ですが、委員の先生方から何か質問等ありますでしょうか。特に10番は大きく変更したというご説明をいただきました。北海道内では一番活発に活動されている博物館ですので、行われている項目も非常に多く、密度も高いです。それに対して外部評価の先生は細かい部分を突くような感じでしたが、道民参加型はこのように変更したということでした。

《質疑応答1》中期目標・計画の目標設定について

中川委員：初めてですので教えていただければと思います。第二期目ということで5年間の計画ということで、利用者数やイベント参加の数値目標がありますが、これは第一期と変えているのか、同じくらいの目標数値となっているのか、教えていただければと思います。

池田学芸主幹：中川委員につきましてはこの質問にお答えするためにも遡った資料もお送りすべきでした。第一期の中期目標がどういうものだったか、それが第二期に向けてどう変わったかという新旧対照表が昨年度の段階でありました。それに対しての、今回の新旧対照表ということになっておりました。今ご質問された目標値等については、後で資料をお渡しいたしますが、基本的には過去5年間、実質的には計画づくりがあるので過去4年間の利用状況を踏まえて、さらに博物館側として今後予測される事業の展開といったものと比べながら、数値をそれぞれ変更したりしています。特に、第一期において目標値と実績値と乖離があったのがレファレンス件数でした。これについても、レファレンスをどこまでのものをレファレンスとして数えるかで違いますが、今回は現実的な精査を加えた数字を弾き出したものと考えています。これ以外にも3月の協議会の場ではご報告しましたが、新たに博物館活動の健全性を推し量る上での健康値を、それぞれの事業についてつけられるものにはつけました。健康診断ではないですが、熱と一緒にあまり多すぎても他の部分にしわ寄せがいくなど、博物館のやるが多岐に渡るので、そのバランス感覚を考慮に入れて各仕事に対して健康診断を設けさせていただきました。資料をお渡しするのでご参照いただければと思います。

住吉委員：二点ございます。一点目は、今のお話にも関連しますが、新型コロナをきっかけにして外部環境が相当変わってきており、来館者や当事者の活動自体が変わってきていますけれど、外部環境が変わっていく中で、定量的な人数とか目標は修正しないで単年度ごとにやっていくのか、どういう風にこの中期計画を立てていくのか。

二点目は、先ほどの、事業報告でもありますが、ガバナンス体制について外部評価でも内部評価でも十分でないということ認識している中で、事業計画ではありますが、中期計画に組み込まれていないのは何か理由がありますか。

池田学芸主幹：まず新型コロナ感染拡大の関係でやはり事態が変わりました。今年についてはこれだけの利用者減があったなど、このあと詳しく報告しますが、基本的には5年間の目標として固めておく、だけれども評価をする際にやはりコロナの影響は、例えばどれくらい防げたなどそういった取り組みについて、いろいろやっています。その中で3月の時も述べさせていただきましたが、今後の5年間で、例えば最初の2年間は随分コロナの影響を受けた。けれど目標にたどり着かない。要するに、単年度ごとに目標にたどり着くにはどうしたらいいかという努力戦略もあるが、一方で目標値の下方修正は当然出てくる可能性があると考えています。ガバナンス体制について、中期目標・計画自体は道民の皆様にも、博物館としてどういう事業をやっていくか、道民のためにいかに動くか、という性格のものであるので、基本的には中期目標計画には載せていません。年次計画の方にはガバナンス体制については評価対象に入っているので、ガバナンスの構造について記させていただいております。中期目標・計画については5年間の憲法ということで、道民に対しての覚悟を示すものという性格のものであると考えているので、ここには入っていないというのが現状です。

大原会長：中期目標・計画は道民の方々が見るものと考えて良いでしょうか。内部評価や外部評価におけるガバナンスについて反映されるのが年次計画あるいは報告ということになりますか。
池田学芸主幹：その辺りも議題5で議論したいと考えています。

湯浅委員：議題5の議論になるかもしれないが、評価の時に目標値が適正か、という議論が出てきます。その中で、健康値を設けるなど新しい試みが入ったのは素晴らしいことだと思いますし、精査された過程がここで納得できていれば次の評価の時にスムーズに、目標値との関係で議論ができると思うので、その精査のあり方とかをこの段階でご説明いただくのがベターかなと感じました。健康値の考え方だと思いますが、全ての数値が右肩上がりである必要はなく、横ばいで良い事業もあるかもしれません。その辺の議論を共有できたら私たちも話しやすくなります。

池田学芸主幹：ありがとうございます。3月の協議会の時に、目標値健康値を算出するにあたっての算定根拠の書類がありました。基本的にはそれに基づいて計算されたということで、見直していただいて、おかしい点等お気づきのことがあればご報告いただければと思います。

《質疑応答2》道民参加型等言葉の使い分けについて

児島委員：細かいところですが、道民参加の推進というところで、道民参加型から道民参加となり、道民参画が最終的な目標ということはわかりましたが、10番のところで館長の諮問に答える道民組織、これは道民の組織であり、アの道民の自主的なサークル活動を支援する、というのと同じで、道民の、ということになりますよね。道民組織という表現について、道民だけがメンバーにいるイメージになりますが、道民参加だと博物館の人に道民が入ってくるというイメージだと思うので、この辺りがよく分からない。道民参加と道民参加型、道民組織と道民参加型活動など、いろいろと表記されており、その辺りが具体的に事業を進める時に混乱しないか、齟齬が起きないかどうかを文章としてきちんと確認された方がいいかと思います。

池田学芸主幹：ご指摘ありがとうございます。北海道博物館が計画される時に重要視された言葉は道民参画型の博物館です。過去の書類を確認しましたが、参画と参加、そこを当館の方でしっかりと使い分けていませんでした。今回、児島委員からのご指摘をいただきましたが、北海道博物館を設立するにあたっての基本計画にて目指すのは、道民参画まで持っていくべきだということでした。現状、当館の一期5年が終わり、二期5年でどこまでを見越してやるかとなると、まず道民参画よりも枠の広い道民参加であって、そこからいかに参画へ持っていけるかという土壌を作れるかという5年間かと考えています。この言葉の使い分けについては今後相当意識させていただきたい。

大原会長：質問ですが、前は博物館が組織を作って道民に参加していただくということで、お店を開いたけれど参加してくれる人がいなかったという状況もあったわけですよね。ミュージアムメイトってだいぶ前から、もっとプロモートするべきという話があったかと思いますが、今回は参加と推進になったので、むしろ組織の枠を作るのではなく、参加していただいた方が自主的に組織を作るものというスタンスに変えたのかと解釈したのですが、そうではないということでしょうか。

池田学芸主幹：それまでの項目のタイトルが、いつの間にか道民参加型組織の整備になっていました。そうすると、北海道博物館自体、当初のイメージではいわゆる友の会であるとか、北海道博物館が直営でできること、基礎的なこと、それをさらに応用的に事業を行えるような友の会なりができることを目指してましたが、かなりハードルが高い。ただ、全国の博物館等を見ているとそれによって事業が展開できている博物館もあるというなかで、諸々の組織を立ち上げるに当たって、クリアしなければいけないハードルが多く、そこにたどり着くのはそれを一つ一つこえていかなければならない。むしろ道民参加という大きな括りの中で、道民と連携する

項目の一つですので、まずは北海道博物館を利用して自分たちの様々な目的を叶えていただく。ただの来館者にとどまらずに関わっていただく、ということからまずは高い目標に向けての底力を作っていこうという発想でございます。

石森館長：私は2013年4月に北海道開拓記念館最後の館長になりまして、7年半経っております。私は当初から当然道民参加型の博物館にしないとイケないと。私の認識としては、それ以前はあまりに道民の方々に活動に参加していただくのが少なすぎるのではないかと感じておりました。7年半が経って、2015年4月に北海道博物館に変わりました、もっと道民の方々に博物館活動に参加していただく、という当たり前のことなのですが、これが館長の私の思いとしてもなぜかスムーズにいかない。あまり言いすぎると諸々の諸活動に支障が生じるので、新しく二つのそれぞれ伝統がある組織を統合するというので、全く新規の博物館の立ち上げるとしたらやりやすいのですが、旧開拓記念館は1971年にスタートしており、それなりの実績を踏まえておりますので、新たな館長が騒いでも皆右から左に動いてくれない。各委員の皆様のご指摘について池田主幹が言葉の面でも説明に窮していましたが、一言で言うと北海道博物館としてはダメです。もっといろいろ手立てを講じるべきです。その点につきまして、博物館協議会では、2015年からずっとご指摘していただいているところで、館長として申し訳ない思いですが、なぜかなかなかスムーズに繋がりにくい。各委員のご指摘を重く受け止めて、なんとか少しでも、できることから一つ一つ実績を積み重ねていくことかなと思います。それは、多くの館員も自覚しておりますので、その点については、中途半端のご回答で恐縮ですが、館長の責任でもあるので、よりよく改めていきたいと思っております。少しお時間をいただいて頑張っていきたいと思っております。

中村委員：池田さんが言葉を選びながらお話しなされたのと、今館長がアドバイスしてくれました。先ほど湯浅委員が言われた右肩上がりの事業もあるだろうし、横ばいの事業があってもいい。そういう見方が大事だと思います。何がなんでも右肩上がりじゃないとダメではない、そういう使い分けを職員の皆様が利用し、活用していただけるよう皆様に援助していきたいと思っております。

石森館長：ありがとうございます。

池田学芸主幹：先ほどの児島委員の道民組織という言葉の違和感については訂正させていただければと思います。道民参加型組織が良いかと思いますがいかがでしょうか。

大原会長：要覧では参加型ですね。参画型と言う言葉もかつてあったということですね。

石森館長：言葉の問題についても整理し直して、言葉だけの問題でもないのだから館員と協議します。少し時間をいただきます。中村副会長のご指摘も大変重要なご指摘ですので、館員にもその旨伝えて取り組んでいきたいと思っております。よろしく願いいたします。

児島委員：そんなに難しいことを申し上げているわけではなく、想いはわかっていて、要するに皆で博物館活動をやりましょうと言うことですね。それを組織とか型とか言うと難しくなってしまう。ただ、答申では道民参加型組織とあった、というお話もありましたが、道民という言葉はなかったのでしょうか。

池田学芸主幹：全文読みます。「道民参加型組織を立ち上げ、外部としての意見徴収・交換の機能を充実させるため、館長の諮問に応える組織を作ることが望ましい。」

児島委員：言葉については、今後ご検討いただくということで。私が申し上げたのは、いろいろな言い方を用いて、具体的な活動計画を立てる時に混乱しないようにお願いします、ということでした。

石森館長：ありがとうございます。

湯浅委員：最終的な 5 年後の目標として、とか、ステップを踏んで道民参加を促進し、最終的には組織を作る、などそういう用語の使い分けをなされれば良いのではないかと思います。

大原会長：ありがとうございます。それでは、中期目標・計画については、協議会としては確認していただいたと言うことでよろしいでしょうか。

池田学芸主幹：ありがとうございます。コロナ対策含め換気のための休憩を取りたいと思います。
大原会長：一旦会議を休止いたします。

《休憩》

《再開》

議題（3） 令和 2 年度北海道博物館事業経過報告

大原会長：それでは、次の議題にうつります。議題（3）「令和 2 年度北海道博物館事業経過報告」につきまして、説明をお願いします。

堀学芸部長：（説明）

大原会長：ただいまの報告に皆様からご意見・ご質問等、お願いいたします。

《質疑応答 1》新型コロナウイルス感染拡大防止策について

中村副会長：コロナ対策でもって北海道博物館が全道のモラルになるような感染防止策をとっていたと聞いているが、その辺りについてはどうでしょうか。

川田総務部長：堀からも報告がありましたが、休館になり、GWを挟んで緊急事態宣言が 5 月末までと予定されている中で、そこを目掛けて感染防止対策を館として考えなければならない。初めての経験の中で、どうやって三密回避をしていくか、館内で議論していくなかで、若干開館の日程が 5 月 26 日と早まって、急ピッチで進めていました。その中で政府の専門会議の提言だとか、日博協のガイドラインなどを踏まえつつ、総務部の財産課からは、道有施設を再開するに当たっては、徹底した感染対策を図ったうえで開館することという指示がありました。そうした中で、幹部職員を集めて毎日のように議論し、当館としてのガイドラインを定めました。正面玄関から入ってきてお分かりの通り、入館受付や、展示場内でのソーシャルディスタンス確保などの感染対策を徹底しての再開となりました。再開にあたって、知事からも記者会見の中で一部ですが話をされておりました。どういう評価をいただいたかはわからない部分もありますが、そうした徹底した感染対策をとって開館にこぎつけ、現在に至っているというところではあります。

佐々木委員：ソーシャルディスタンスのとりかたとか、入場者制限についてですが、入場者制限はどのような形で行ったのでしょうか。事前予約制や、入口で待機させるなど考えられますが、その辺りはどのように行いましたか。

堀学芸部長：展示室は約 3000 m²あるので、距離をとっての人数を想定して、ワンフロアあたり 150 人を最大として想定し、入館時にカウントして、今のところ時間指定はしておらず直接来られる方を受け付けています。夏以降、入館受付の中でそれがあふれることはなく、今のところそれを超えてはいないので、そのままにしております。

佐々木委員：学校団体が入るようになって、来館者はどの程度回復されたのでしょうか。

堀学芸部長：学校団体は、多い日で 300～400 人近い日もあります。そのような時は、密を避けるために、1 階から回るグループや 2 階から回るグループだったり、昼食時間をずらしていたくなど、グループ分けをして、常時入る人数を少しづつずらしていただくようにしております。

す。

佐々木委員：それでワンフロア 150 人は維持されているのですか。

堀学芸部長：ここ最近、2m のソーシャルディスタンスから、人とふれない程度の距離に保つというように、規準が緩和されているので、現在は問題ない状態になっています。

議題（４） 令和 3 年度北海道博物館事業年度計画概要報告

大原会長：それでは、次の議題に移ります。議題（４）「令和 3 年度北海道博物館事業年度計画概要報告」につきまして、説明をお願いします。

池田学芸主幹：（説明）

大原会長：ありがとうございました。それでは来年度の事業計画について、計画を立てる前のアドバイスをお願いしますということですね。これからの予算要求も含めてですね。

《質疑応答 1》海外研究交流について

佐々木委員：一点だけ。海外の博物館との交流も計画されていますが、現時点で見通しはどのようなのでしょうか。

小川学芸副館長：研究部長としてお答えします。海外の博物館との交流については、コアになるのは人の行き来、当館と相手方の博物館とで職員 2 名が毎年交互に派遣しています。来年人の行き来ができるかについては、今のところわかりません。海外のビジネス絡みの往来は緩和される動きが出てきていますが、博物館交流についてはまだわからないので、五分五分というお答えとします。ただ今年度が交流関係を結んでいるアルバータ州との交流協定 40 周年となっておりまして、当初予算要求では人の行き来を含んだ事業を計画していたところを、ある程度オンラインで何かできないか、人のやりとりができないなかで、お互い交換できるものがないかというところで模索しています。そういったことを視野に入れて今のところは考えています。

《質疑応答 2》展示や行事の実施について

住吉委員：いろいろ行事計画や事業計画が（今年度の行事案内や年度計画に）並んでいますが、今の状況がそのまま続くとしたとして、このような展示や行事は実施しますか。

堀学芸部長：現在の状況が続くのであれば、行事自体はかなり入館者数や参加者数を制限した計画をしていますので、現時点の状況が続くのであればこのまま実行する方向で進めたいと思っています。ただ、状況がさらに悪くなり、博物館を閉めるなどの状況になる時には、一旦休止という判断をせざるを得ないと考えています。

住吉委員：わかりました。現在の状況が継続する中では実施するという考えですね。

堀学芸部長：はい。

大原会長：他はいかがでしょうか。私から一つ。おうちミュージアムはコロナ禍でなくても効果があるという話でしたが、コロナの後、いわゆるアフターコロナでは世の中変わっていると思うのですが、例えばオンライン講座を行うための撮影室や撮影機材。それから、この会議も今の状況だと開催できますが、少し状況が悪化したらオンラインになる可能性もあります。そのあたりについて、（博物館には）十分な設備はあるのでしょうか。あとは、聞いた話になりますが、換気について、プラネタリウムがある館では、プラネタリウムごとに換気や椅子の配置を変えたりしているようですが、コロナを機にいろいろやってしまうのが良いかと思いました。これは聞いた話をお伝えいたしました。

大原会長：それでは、事業計画についていくつかコメントがありましたので、よろしく願い致します。

議題（５） 北海道立総合博物館協議会のあり方について

大原会長：それでは、次の議題に移ります。議題（５）「北海道立総合博物館協議会のあり方について」、説明をお願いします。

池田学芸主幹：（内容を説明）

以上のような形で、協議会と評価のあり方について、事務局として案をまとめてみました。今回の協議会において、以上の改正案について、概ねその方向性がご了承いただければ、次回、第２回の協議会において、外部評価、内部評価の要領の改訂も含めて、具体的な方法について検討し、その案をご報告してまいりたいと考えております

大原会長：ありがとうございます。今年三月で一期が終わって外部評価を出した。今年度から二期になるのでやり方を少し見直しましょうというご提案です。

私の理解しているところのお話ですと、北海道総合博物館条例の第二十条に「総合博物館の事業を円滑かつ適正に行うため、知事の附属機関として、北海道立総合博物館協議会を置く」と書いてあります。ですので、私たちの役目は事業が円滑かつ適正に動かすためにある協議会です。評価のためというのが大きくなってしまっておりますが、そのためにいるものではないのですね。第二十一条には「協議会は知事の諮問に応じ、総合博物館の事業に関する重要事項を調査審議する」とあり、「協議会は、前項に規定する事項に関し、知事に意見を述べることができる」というのが、一番初めに協議会ができたときに諮問をいただいた、外部評価のやり方を検討してくださいというものです。それに対してこういうやり方がいいですという風にお返事をしたのですが、その後、協議会を円滑かつ適正に行うため、というなかに評価が入っているので、なぜか知らないけれど、やり方を作った私たちが評価も行ってしまう、外部評価とはなんだという意見も出てきました。

そこで、それらを整理してもらったのが、今回のお話であります。今までは内部評価というのは、博物館で１年に一度やって５年間積み重ねていただくもの、外部評価は、その中間期と５年後にさせていただくというものでした。この外部評価は内部評価に関わっていなかった全く関係ない外の方に評価してもらった時に、客観的な意見を出していただけるのではと思っていたのですが、毎年内部評価などにアドバイスしながら関わってきた協議会の委員がやるとなると、それはお手盛りではないかという意見がありました。ただ、協議会委員の先生方は外部の人間でもあるので、「外部」ということは確かではあります。ですので、外部評価という言い方をやめて、協議会評価とすれば、丸くなるのではないかというところなんです。なので、諮問にもあまり逆らわずに、毎年外部の評価を入れながら、５年後にはきちんとした外部の意見として、協議会評価を私たちがまとめるという構造です。そうすれば外部評価ではありますが、毎年見てもおかしくないのかなというのが、協議会のあり方と整合性があるのではないかなというのが、私の理解です。さらに、５年分の３６枚のシートを全部見せられてこれでABC評価をなささいと言われてきたのですが、毎年内部評価のチェックとして協議会の意見を出してきたので、５年分の外部評価と言われてきたものは、その総括の７シートにさせていただいて、それに対して評価をするという協議会評価として良いのではないかというご提案だと思います。

私はまだひっかかっているところは、ABC評価は今までの外部評価でしてましたが、その部分は５年後のところではSABCは無くなるかもしれない、というところなんです。この辺りはまだ議論があると思います。

以上が私の今のところの理解であります。その上で、先生方にご意見をいただければと思います。あとは、シートの項目の付け方もガバナンス、責任がわかるようなシートの作りにしてい

ただくと、36枚の時のような誰がどこをやっていたのかわかりづらいというのが、整理されるというところで枚数も少なくなるだろうということです。ただ、これは評価部分ですので、それ以外に私たちが協議会として年に何回か行う活動の方が、実は本来のものである、ということも再認識していただければと思います。

児島委員：私たちがSABCをつけるときのデータがないと言っていたのは、今度からは要覧に書きますよという話ですよ。それを見てくださいということですか。根拠となるデータについては要覧にありますよ、という説明ですよ。

池田学芸主幹：基本的にはそうです。本当の根拠になるデータは、要覧に年度ごとの事業実績全てが載ることになります。基本的に、これまでは悉皆的に評価をいただいていた道民との連携で言うと、そこにさまざまな項目に個別評価をつけて、総体的に評価をする作業をしていたかと思います。今期（第二期）からは博物館の大きな課題は「ここです」とか、「次の目標は社会の変化を見てこういう方向に進むべきだ」とか、そうした大きな議論のご意見をいただいた上で、次の目標期の設計図に持っていきたい。それをいわゆる協議会評価の形でいただくことで、外部評価がそういう形でなされていくという風に持っていきたいというところでございます。

児島委員：ありがとうございます。最初の内部評価のところに戻りますが、私たち協議会が何をやるかというところが最初はよくわからなかったんですね。外部評価もするの、など。そういうことなかで、時々、これだけの事業をやることを計画されていて、とてもいいから、道庁に予算をつけてねというのを提言したりできるというのがあったのですよね。その辺の部分は、どうなっていくのですか。協議会の（出席者の）中に道庁（本庁）の方もいるわけで、その辺の関係性とか、お手盛りと、そういうのがあったりするのでしょうか。私たちがどういう立場なのかが結局わからないところがまだあります。内部評価の中で、例えば、予算の面と人員の面でこれは無理だった、という話はなかったのか。そういうのを知りたかったですね。私たちはより良い北海道博物館の運営に力添えができればという応援団のようなものであるといったことが、最初のことだったんですね。もちろん、計画の段階でお考えになってできることを計画しているとは思いますが、その辺でこの協議会の位置づけがまだわからないところもあります。

池田学芸主幹：簡単にですが、その応援を、毎年の内部評価の点検の際や、あるいは任期で切るか5年で切るかはありますが、最後に次の時期に向けてのさらに応援をしていただくことで、それが外部からの博物館に対する評価です、という形にしていきたい。

川田総務部長：評価を行ってそれがどう生きていくかということですが、確かに内部評価をしたり外部評価をしていただいた上で、それがどう改善に結びついていくかと言うのが一番重要なところになってきます。それがないと、何のために評価をやっているのかということになります。館の責任においてできる部分と、予算の面や人員・組織の面とかは、館だけでは解決できない問題で、そこは（本庁の博物館を所管する）文化振興課に館から働きかけていますし、それをどう受け止めていただけるかですが、環境生活部にもいろいろな課題もありますので、その中でどう取り組んでもらえるかということです。館としては働きかけていきますので、できれば応援していただいて、いろいろと意見をいただければ良いのかなと思います。いただいたものが全て結果に結びつけられるかということ、予算の面についても、獲得できるもの、獲得できないものもあります。そこは、できるだけ確保できるように働きかけていきたいと思えます。

大原会長：いかがでしょうか。実は、今回の構造にすると（今回、博物館から提案のあったしくみに変えると）外部評価の外部という部分が弱くなるのは確かです。5年に一度、全然外からの

人が見て北海道博物館はこうあるべきだ、それを館だけでなく、知事や道庁に言う、というところで何か動き出すという構造だと思いますが、今の協議会に評価をしてもらうという構造では、それが足りない部分であるとは思いますが。それは、前回の外部評価の際に書いているものではありませんので、5年に一度それを繰り返すというのをしていくと、条例にもう一つ外に外部評価機関を置くというのをつけていただくと良いと思いますが、ただ、道庁や行政的に馴染まないのであれば、馴染むように行政が変わってください、という一文を付け加えるということですね。それを繰り返すしかないと思うのですが、児島委員が言われたように、弱さがある構造だとは思いますが。私たちは応援団ですので、北海道博物館がよくなるように言っていますので、それを行政側がそれは無理だというのは分かりますが、その行政側とのせめぎ合いのバランスを強くするための協議会だと思いますので、是非とも利用していただければと思います。これはすぐに決まるものではなくて少し時間の余裕はあるものですよ。

池田学芸主幹：2月に予定している第2回協議会で、その具体的な話をしたいと思っています。その場合、要項（内部評価要領・外部評価要領）なども変えることとなりますので、そういったものや（評価）シートの枠組みを含め、具体的なものを提示するということになるかと思えます。事前に大原会長とのやりとりをさせていただければと思いますが、逐一ご相談しつつ作り上げていただきたいと思います。

大原会長：あまり時間はないかもしれませんが、今までメール協議会はありませんでしたが、電子協議会のような形でまとまったものを皆さんに見ていただくということをして、進めていくことも考えていってくださればと思います。

湯浅委員：「負担軽減するために」という言葉が前に出ると残念なので、より建設的な意見を運営に活かすために、こう評価のあり方を変えたというのを押し出す書き方であると良いと思います。

大原会長：先ほどのシートの数なんかも、事前に打ち合わせした時に、内部資料や外部資料というか、確かに評点をつける時には内部資料のデータが必要だと思います。これが36枚だとしたら、これは抽出したものをらせていただいてもいける場合がありますが、ただこういったものは作っておかないといけないなとは思っています。

議題（6） その他

大原会長：次に、「その他」についてですが、委員のみなさま、もしくは事務局から何かございますか。

6 閉会

大原会長：それでは、すべての議題について協議を終えましたので、本日の協議会は、これをもって閉会いたします。皆様、お疲れさまでした。